

今回の話題は隣の隣の国、キルギス。三〇年前までは隣の国、ソ連邦に属していた。一九九一年に中央アジア五か国が一斉に独立したのだが、気が付いたら独立していたと言った方が正確かもしない。その後は市場経済化をめざしたが、石油などの地下資源にも恵まれないキルギスは五か国の中では下の方にランクされている。したがって、国民は出稼ぎを除けば、農牧業に多くを依存している。もともとキルギスは遊牧民の国であった。しかし、ロシア帝国の拡張につれてロシア・ウクライナ農民が大量に侵入し、

平坦な草原は開墾されて農地となつていつた。ソ連体制になつてからは定住化が進められ、さらに一九五〇年代にはロシア移民が主導して集団農場が設立されいく。

農業国であるキルギスのショックセラ

ピーによる市場経済化は、この集団農場を農場構成員のみならず、農村住民全員に配分するというかたちで行われた。農地をあげるから、これで何とか凌いでください、社会主義からの餓別です、といふわけである。市場経済化ではなく、自給経済化であった。それから四半世紀が

過ぎて、商品経済化も進んできているが、三六万といわれる「農家」の市場アクセスの手段は乏しいままである。それならば、農協が出番ではないのかということで、われわれのキルギスとのおつきあいが始まった。

われわれの活動の場とは、JICA北海道による「中央アジアでの農民組織化のための研修コース」である。私は黒河功さん（当研究所元所長）の跡を継いで、二〇〇八年からこのコース長を担当している。当初は、一方的に日本の農協など農業団体の組織や機能を理解してもらっていたが、一ヶ月の研修の間に帰国後に取り組む課題（アクションプラン）をまとめてもらつという無茶な「改革」があり、われわれは研修生の母国の状況を理解することを迫られた。それは願つてもないチャンスであり、中央アジアの参加国中最も農協づくりに熱心であったキル

み る 観察

キルギスからの贈り物

一般社団法人 北海道地域農業研究所
所長 坂下明彦

ギスを訪問することになった。一〇一三年のことである。以降、毎年のように現地で農協づくりフォーラムを開催したり、典型的な農協の調査を実施したりしている。一〇〇農協ほどを組織しているキルギス協同組合連盟（CJK）のスタッフも順に札幌の研修に参加し、彼らとの関係も密になってきた。

われわれが調査している北部のイシククリ湖周辺の農協は、日本で言うと農事組合法人のような土地利用型の小規模生産農協が多いが、南部のオアシス地帯では果樹の専門農協が多いようである。いずれにしても規模は小さいし、連合会組織もまだ弱い。「農家」といってもよくわからないので、若手の星野が二〇一九年の一年間、村に入つて参与観察を行つた。これらの活動は『ニューカントリー』（一〇一九・四～一〇一〇・五）に連載されている（注1）。

しかし、一〇一〇年からはコロナ禍によってキルギスへの往来もままならず、JICA研修もズームによる遠隔研修となつたため、何か始めようと企画したのがキルギスからのユルタの輸入である。キルギス人は農耕によつてロシアに感染されたといつても、遊牧の血は衰えてはおらず、集団農場の解体でもロシアと違つて牧畜は壊滅しなかつた実績がある。ユルタはその象徴である。

今年の春から現地に詳しい星野が連絡を取り、われわれが調査・交流拠点としているイシクリ州のユルタづくりで有名なクズル・トウ村で手作りされたものを送つてもうつことになつた。送つてもうつたので「贈り物」というが、価格は五、〇〇〇ドルぐらいであった。直径六

mの丸型の移動式テントであり、重さは六〇〇kgもあつた。もう一つの私の家がある栗山町湯地の丘に総勢一〇人ほどで設営を行つたのが六月であつた（写真）。



写真：ユルタの設置完了 2021.6.26

キルギスの遊牧は天山の北麓を舞台とするので垂直移動であり、最も低い冬の营地から春夏秋の中間の营地を経て、高地の広々した夏营地（ジャイロ）へと季節移動する。营地では、昔は親族外を含む数戸の家族が集住するため、この移動住居ユルタは数戸の共同で設営される。

テュルク（トルコ）語であるが、モンゴル語では「ゲル」、中国語では包（バオ）であり、日本人にはパオが馴染み深いであろう。

ユルタのかたちは遊牧の環境によつて多様性があるようだが、われわれのユルタはキルギス北部で「ボズユイ」と呼ばれるものである。ボズは灰色、ユイは家という意味で、白い羊毛に黒い羊毛が少し混ざっている。円錐状の屋根が高く張り出しているのが特徴であり、高さは三mもある。山に囲まれ風が強くない地域のために、高山に似せたかたちが可能だつ

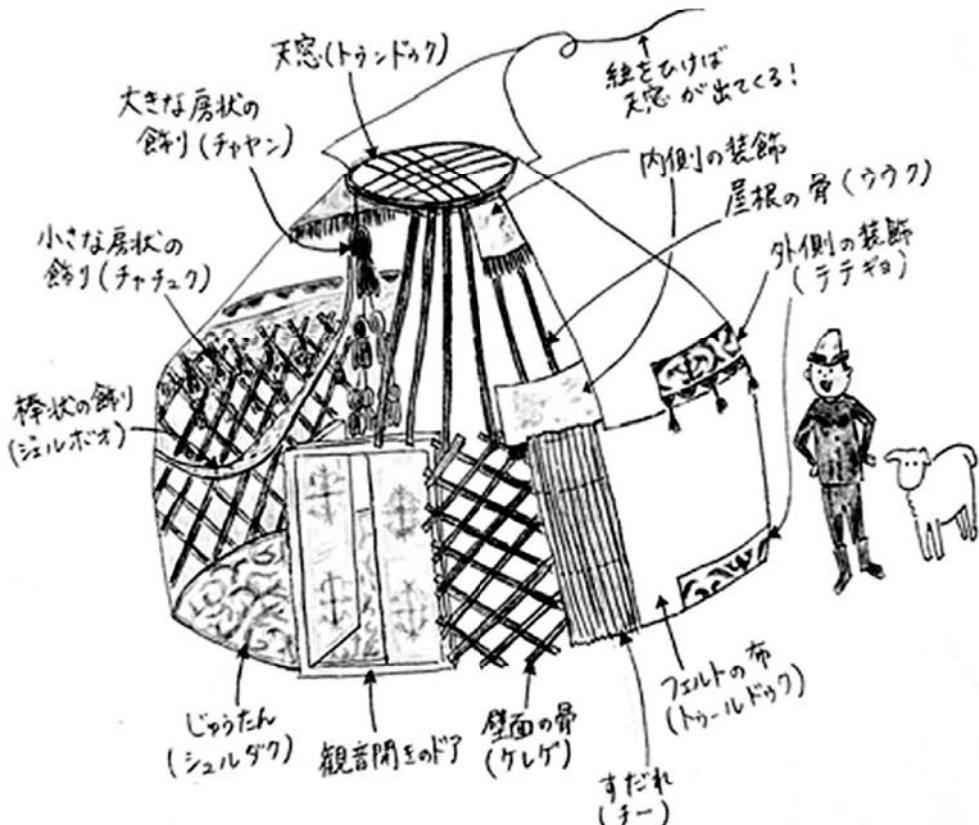
たのであらう。強風が吹く北のカザフ草原やモンゴルでは天井が低い造りであり、他にもバリエーションがある。

直径六mのものの在庫がありすぐ送れるというので、あまり大きさを考えずに注文したが、壁面の蛇腹状の骨（ケレゲ）が六つ、屋根の骨（ウウク）が八五本、大きな円形の天窓の枠（トウンドウク）があり、膨大なフェルトの山もあった。確かに六〇〇kgはある。こんなでかいものが立ち上がるのかと不安になる。側面は簡単だから、棟上げ、これが勝負である。一〇人を動員した人海戦術となつた。

ケレゲを円筒状に並べて入口の枠をはじめ込み、この拡げた蛇腹の一一本との柱にウウクを組みひもで八五か所も縛り付ける（イラスト）^(注2)。これは屋根をかさ上げするために根元から五〇cmほどで湾曲している。上は丸い天窓の木に開けられた穴に差し込まなければならぬ。

外観は白で、黒い羊毛で飾られているが、骨組みは赤に着色されている。内側の壁面を赤い帯をまわして補強し、最後に赤の装飾品を飾り付ける。ユルタの内部は外観の羊色とは異なり、羊の肉や血の色のようだ。この派手な赤は喜びや富、繁栄の象徴だという。われわれも完成の喜びに浸る。

地元のプロの人なら一時間というが、



イラスト：ユルタの構造

by Hoshino Akari

われわれの設営はおよそ六時間を要した。写真で見ると、一〇人ばかりの力の結集である。ほとんど雨の降らないキルギスとは異なり、大雨で浸水の危機に陥ったりしたが、ユルタは湯地の丘陵の風景に溶け込んでいるようである。馴化の必要はあるが、コロナ禍が一段落したらキルギスとの文化交流の一つの拠点に育てたいものである。

(注1) 連載をまとめたものは、坂下明

彦編『遊牧の国キルギスで農協をつくる』として本研究所HP「所長の研究室（へや）」に掲載している。

<https://www.chiikinouken.or.jp/>

(注2) ユルタのイラストは星野愛花里（北大農学院博士課程院生）作であり、その構造についても教えてもらつた。